

月日は百代の過客にしてゆきかふ年も又旅人なり舟の上に生涯
をうかべ馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を
すみかとする古人も多く旅に死せるあり予もいづれの年よりか片
雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます海濱にさすらへ去年の秋
江上の破屋に蜘蛛のふるすを拂ひてやゝ年もくれ春立る霞の空に
白川の關越んとそゞろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のま
ねきにあひて取物手につかずもゝひきの破れをつゞり笠の緒付
かへて三里に灸すゆるより松島の月先心にかゝりて住る方は人
にゆづり杉風か別墅に移るに草の戸も住かはる世はひなの家お
もて八句を庵の柱にかけおき彌生も末の七日明ぼのゝ空朧々と
して月は有明にて光おさまれる物から不二の峰幽にみへて上野
谷中の花の梢又いつかはと心ぼそしむづまじきかぎりは宵より
つどひて舟にのりて送る千住といふ所にて舟をあがれは前途三
千里のおもひ胸にふさがりて幻の巷に離別の泪をそゝぐ行春や
鳥は啼き魚の目は泪是を矢立の初めとして行道猶すゝまず人
々は途中に立並びて後影の見ゆる迄はと見送るなるべしことし
元禄にとせにや奥羽長途の行脚たゝかりそめに思立ちて吳天に
白髪 of 恨を重ぬといへども耳にふれてはいまた目にみぬさかひ若
生きてかへらばと定めなきたのみの末をかけ其日漸く早加とい
ふ宿にたどり着にけり瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむたゝ身
すからにと出立侍るを紙子一重は夜のふせぎゆかた雨具墨筆の
たぐひあるはさがたき餞などしたるはさすがに打捨がたくて路
次のはづらひとなれるこそわりなけれ室の八島に詣す同行曾良